〈書評〉

『ウィリアム・モリスの夢――19 世紀英文学における中世主義の理想と具現』

南郷　晃子
NANGO Koko

Ⅰ　清川祥恵『ウィリアム・モリスの夢――19 世紀英文学における中世主義の理想と具現』、2025 年、晃洋書房

Ⅱ　ウィリアム・モリスに結ぶ

清川祥恵『ウィリアム・モリスの夢――19 世紀英文学における中世主義の理想と具現』は、神戸大学国際文化学研究科に提出された著者の博士論文を加筆・修正・再構成したものである。本稿はこれを評ずるものだが、評者の専門領域は全く異なっており、英文学の専門的な知見からの書評ではないことを最初にお断りしておく。

著者が取り上げるウィリアム・モリスは、今日の私たちにとって「モリス柄」と呼ばれるデザインで身近な存在である。けれどもモリスと聞いて文学者だと考える人はなかなかいないだろう。モリスについて仮によく知っていれば、社会主義者、詩人、デザイナーとさまざまな顔を持つ人という認識になるのではないだろうか。本書はその社会主義者としての顔もデザイン世界も、モリスの織りなす言葉の世界と分かちがたいものであることを明らかにする。

本書が一貫性を見出すのはモリスの活躍した「分野」ばかりではない。「序論」で全体像を示したのち、本書は基本的には時間軸とともに進む。モリスへ影響を与えた彼以前の「中世」概念からはじまる第一章を経て、第二章以降はモリスの初期作品・中期・晩年へとゆるやかに進む。このなかで著者は時期による変化を論じるというよりも、変化を論じられがちなモリスについて、むしろ変わらなかったもの、各時期のモリスに通底するものを浮かび上がらせる。ある意味、時間を逆行させつつ読むかのような、晩年のモリスを見据えた論が展開されるが、生涯の年譜を前提に論じるというのではない。モリスというひとりの人物を貫くものを見据えている。

この一貫性の軸となるのはモリスの理想的世界としての「中世」である。実際の中世そのものではなく、モリスの内なる理想の「中世」世界である。そして理想は常に現実への

批判をはらむ。本書は、モリスにおけるいま・ここへの批判（あるいは嫌悪）とその表裏である彼の理想—「中世」に委ねられる—を軸に作品を読み解く。

モリスにおける「いま・ここ」は、十九世紀ヴィクトリア時代のイギリスである。当時の同時代批判は、ひとり彼のみが行ったのではない。第一章「「中世」の理想を旅する——中世主義の史的展開」は、モリスに先立つ批判者の眼差しとともに、この時期の時代性を示す。それは工業化が進み仕事における手の役割が失われ、物作りから人間が遠ざかっていく、物に人間の痕跡が失われていく時代である。モリスを語る上で重要なキーワードになる「中世主義」は、そのような時代の産物として展開された。「中世」という言葉により強調されるのは、宗教的意味よりもむしろ、喜びを伴う労働、そしてそれにより生み出される「もの」の芸術性である。労働が一個の人間を分断するものとなった「近代」にあって、労働が芸術的喜びを伴うものでありえたという過去、すなわち「中世」が見出されたのである。モリスはそのような中世主義、主にジョン・ラスキンのそれに影響を受けている。こういった点を前提として著者はモリスの中世主義の独自性へと分け入っていく。

第二章「「中世」の美しさを讃える——初期作品における憧憬」では、ダンデ・ゲイブリエル・ロセッティからの影響、そしてモリスの初期創作とそのロマン主義的要素が『人知れぬ教会の物語』という作品を中心に論じられている。著者は「内なる詩」を形にしようとするロセッティからの影響を認めつつ、モリスの独自性へと筆を進める。そして中世の教会を舞台とする同作品を「精神的紐帯が存在した時代を現代に伝え、またふたたび希求するためのものへとつながっていく」（58 頁）と評ずる。これはのちの彼の「フェローシップ」概念へと誘導する。

第三章「「中世」の儚さを描く——『地上楽園』における弁明と幻視」以降は、モリスの作品世界の内部へとさらに踏みこんでいく。本章はモリスの名を世に知らしめた『地上楽園』を中心に、社会主義運動に没頭していく以前にすでに彼が持っていた理想を分析する。『地上楽園』で、主人公は夢の中で知り得た生への喜びを持ちながら目覚めのときを迎える。生への喜びとともに「目覚める」ことへの熱情はその後のモリスの社会主義運動へとつながっていく。

第三章には、本書の潔さがよく表れているように思う。妻ジェインに捧げられた本作品が、著者が先行研究を通じて示すように、モリスとジェイン、そしてロセッティとの関係に結びつけられて理解されるのは、自然なことに思われる。しかし著者はその点にのみこの作品が回収されるのは「適切ではない」（73 頁）として、作品に漂うモリスの無力感を「近代」に紐づけていく。作品を論じるとき、作家個人の逸話に結びつけるという手法は現在主流ではない。しかし、作品の理想や苦しみが個人的体験「のみ」に回収されることはなくとも、それと無関係にあるということもまた考えにくい。けれども著者は作品を論じるにあたり、モリスの個人的経験にはほぼ触れることすらしない。あくまで時代の中での創作行為であることを際立たせていく。モリスの理想／苦しみを、時代・社会状況やそれに涵養された思想の問題として論じる方向に振り切るのである。作品創造の背景をモリスの個人的出来事にみるのではく、時代・社会に問うという本書の方向性が、作家のスキャンダルへの沈黙に示されているように思う。

こうした点は第四章「「中世」という希望を紡ぐ——社会主義転向と詩人の「夢」」にも見

て取れる。本章は『地上楽園』と『ジョン・ボールの夢』の間を繋ぐ作品として『希望の巡礼者』に焦点を当てる。この作品では主人公の妻と友人アーサーが「まるで夫婦のように」寄り添って死ぬ。本作がモリスの妻ジェインとロセッティの不倫関係を重ねたものを懲罰として書き表したものだという解釈を著者は否定し、それはむしろ死によって壊れない結束を書いたものであると、フェローシップ概念と結びつける。

懲罰ではないという点は賛同できる。その上で、主人公の妻とアーサーと主人公の三人がフェローシップを介し出来事の悲劇性を乗り越えるのであれば、フェローシップ概念は、妻ジェインとロセッティの結びつきという、モリス固有の苦しみを克服する概念でもあったということになりはしないか。しかし著者はそのように論を進めることはしない。フェローシップがどのように同時代の敗北を未来への希望につなげるのかということに視点を広げていく。

著者は『希望と巡礼者』には「敗北」からの「希望」が語られていると示す。敗北を語り続けることが、人々を結びつけるという観点は、第五章「「中世」からめざめる――『ジョン・ボールの夢』における「フェローシップ」」につながっていく。『希望の巡礼者』そして『ジョン・ボールの夢』は社会主義プロパガンダを含むとされるが、著者が注目するのは、そこではなく、語ることに対するモリスの意思である。

著者の論で特徴的な点のひとつが、時間、あるいは歴史をめぐる捉え方ではないか。著者は、過去を語ることが未来を担保するという、モリスの物語のあり方を繰り返し指摘するが、第五章ではそれがフェローシップ概念とつなげられていく。すなわち、モリスにとってフェローシップは同時代人にのみ結ばれるものではなく、未来から過去へ、過去から未来へという対話からも育まれうるものであることが『ジョン・ボールの夢』を通じ明らかにされる。挫折と思われた過去が、未来を生み出す。その読み替えを可能にするものこそフェローシップなのである。過去・現在・未来をつなぐフェローシップがジョン・ボールの死を生に、挫折を成功に変える。

第六章「「中世」という未来へ――『ユートピアだより』における「ヴィジョン」」は『ユートピアだより』を読み解く。これは社会主義的ユートピアを語った作品とされるが、著者は同作品においてもむしろその中世主義に焦点を当てる。いうまでもなく近代の社会主義者たちにとっての理想の未来が社会主義の世だが『ユートピアだより』のそれは「中世」である。モリスの社会主義者としての活動は彼の中世主義と地続きなのだ。『ユートピアだより』において、未来へ足を踏み入れた主人公はしかしそこの住民たちとフェローシップを結ばぬまま現在に帰る。著者は主人公ばかりが未来と連帯を獲得しても真のフェローシップとはなりえないと、指摘する。

第七章「「中世」をかたどる――大聖堂、書物製作、ロマンス」では、特に『サンダリング・フラッド』に焦点を当て、その前提としてモリスの印刷工房、ケルムスコット・プレスの活動に言及する。すなわち、コンテンツのみでない「もの」としての理想の書物がいかに追求されたかということについて詳述する。モリスの理想は書物が「叙事詩的性質」と「装飾的性質」を持つことである。その上で『サンダリング・フラッド』について、生における「喜び」が芸術として具現化されうる時代として「中世」が表されていると述べる。事実としての中世ではなく、理想としての「中世」である。

この、ケルムスコット・プレスの書物への理想は、すでに第一章のうちに垣間見えている。生活と芸術の一体化への希求が、その後のモリスの「近代社会への闘争」（28 頁）を支えていくと告げられていた。本書を通じ、モリスは一貫した理想を持っていることが繰り返し示されている。どの章にもモリスの持ち続けた理想が語られており、円が閉じるように、その晩年の活動に彼の若かりし頃の理想が接続するのである。

まとめに入る前に、書評の責を果たすべく、敢えて気になる点を述べるならばモリス作品の文章そのもののへの言及がほとんどないことだろうか。作品内容、コンテンツの分析はもちろん豊富にあり、むしろそれが本書の基盤となっている。また作中に使われている言葉は鋭く拾い上げられ、その含意についても詳述されている。しかし言葉と言葉のつらなり、センテンスの配置、文章そのものがいかに紡がれるかという、文の「外形」への言及が十分にみられないという点は指摘することができよう。ないものねだりではあるが、物語と、物語を包む書物の美しさにモリス理想が込められているのならば、物語を織りなす言葉の世界がどのような形を持ったのかということを問う必要はなかったのだろうか。それは彼の理想と無関係でありえたのだろうか。その点が気に掛かった。

さて、モリスの作成する美しい書物は彼の理想の具現であった。そして本書『ウィリアム・モリスの夢』は美しい本である。カバー、表紙・裏表紙はいうまでもなく、扉や遊び紙の色合いまで、一見してこだわりぬいている。無論これはウィリアム・モリスが、内容のみならず「もの」としての書物の調和の美しさを希求したことを踏まえてのことである。著者はあとがきにおいて「モリスの理想の版面に近づけたいという思い」があったことを述べる（182 頁）。それこそが本書の特色を表していよう。つまり、ウィリアム・モリスが育んだ理想を論じつつ、それに今・このときを重ねている。モリスの本作りを語りながら、あたかもそれをここに再現しようとするかのようである。そしてそれは、論じる内容そのものにも通じる。著者自身が述べるように本書のタイトル『ウィリアム・モリスの夢』は『ジョン・ボールの夢』を踏まえたものである。

モリスの生きるのは、十九世紀イギリスである。著者にとって、時はただの数字ではない。時代意識とともにあるものである。十九世紀イギリスは近代化の中にあり、モリスはその時代を相対化するものとしての夢の「中世」を語る。過去にあった、かのような中世を介して理想をえがき、それは理想の未来へとつながる。

そして今は近代化が推し進められた先にある。後書きで著者は、百円均一に売られるモリス柄について触れる。『ユートピアだより』の夢想した 2000 年とは異なり、美の創造は報酬にはなり得ず、人の手を省いたものこそが安価になる。手を使うこと、他とつながることが生命の喜びだと語ったモリスの理想は、いうまでもなくことごとく潰えているのが現代社会である。言葉さえも、人間の身体を通ることなく、命を持たぬものから生み出すことが可能になった。人と人とのつながりは、とうに希薄である。

著者は理想の潰えた現代にあってモリスを語る。幻の過去を再起させながら未来の希望を語るモリスについてである。著者はモリスと重なりつつ、そのようにして今の理想へと眼差しを向けているようにみえる。

本書の特筆すべき点は、作品を読み解く上での、社会・時代への眼差しの強さであろう。しかし社会分析が先立つものではないことを、最後に強調しておきたい。それは透徹した

作品理解、読みを経て獲得される眼差しである。本書には作品を作家個人のエピソードと結ぶことへの忌避があると指摘したが、作品世界を作家の個人史のうちに回収しないことで、作品は他者に開かれる。個の問題に収斂されない苦しみ、理想は時空を超えたフェローシップを結ぶことを可能にする。著者のモリス論は、その論自体がモリスの理想を現前させるような構造を取るといえるのではないか。本書はモリスの生み出す作品世界への徹底した没入の成果として理解されよう。